

メディアを開く／メディアから開く

——佐藤俊樹のルーマン論から——

Unfolding Media into Society, and/or Unfolding Society Embedded in Media:
Reading Toshiki Sato on Niklas Luhmann

遠 藤 知 巳
ENDO Tomomi

【要約】人々に不信を抱かれながら、マスメディアが恒常的に作動しつづける。現代社会のこの様相の分析は重要な社会学的課題だが、ルーマンのマスメディア論を別にすれば、満足のいく議論は少ない。ルーマンを精緻に読解し、経験的システム論を提唱する佐藤俊樹は、彼のマスメディア論に注目し、ルーマン理論の意義と問題点を剔出しながら、メディアの埋め込まれた社会のしくみを探究している。本論文は、両者のテキストを往還し、それぞれの議論を分析しつつ、現代のマスメディアが社会に及ぼす諸作用や、メディアにおける受け手（の構築）の位相と社会との複層的連関を考察する。

1. ルーマンとメディア論

現代社会の特徴の一つは、メディアやそれが生み出す諸事象に広く浸潤されていることだ。19世紀近代の進行のもと、マスメディアとパーソナルメディアの萌芽的諸形態が出現し¹⁾、20世紀以降、産業的にシステム化され、さまざまな結節点を形成しながら大規模に展開していった。現在のインターネットの隆盛は、マス／パーソナルメディアの混淆・融合形態として、これまでの「メディア」の輪郭自体を変容させつつあるように見えるが、それもまた、基本的にはこうした過程の延長線上にある。

メディアが埋め込まれた社会をいかに分析するかは社会学にとって重要な主題だが、そこには特有の困難さがある。メディアが社会とあまりに近接していること自体が、その最大の要因だろう。メディアは社会についての雑多な情報を日々産出し、流通させる。インターネット時代に入ると、受容者たちがそれらを適宜切り取って複製し、再加工を施して発信することが技術的に容易となる。情報の断片のこうした乱反射も含め、メディアはそれなりのやり方で「社会」の像を構築しつづける。

企業体であるメディアがそうした役割を担うことで、厄介な問題が発生する。メディアは利潤目的のみでニュースを生産しているのではない。それは一定の公共的機能、少なくとも、商業的だけとはいえない側面をもっている。そのことに対するなにほどの信頼があってはじめて、社会に広く定着できる。あるいは、社会に受容されているという事態が、そう振舞うようにメディア企業を縛る。しかし、広告(CM)の存在が雄弁に語っているように、メディアは商業性から離れることができない²⁾。中立的立場を標榜しても、クリティカルな局面ではとくに、自己利益のために動く（関係組織やスポンサーへの付度、キャンペーン作りへの動機など）。ビジネスとし

て不可欠なエコノミー（たとえば、時間的・資本的制約による取材の打ち切り）に拘束されるので、記述はしばしば、出来合いの図式の組み合わせに頼る。そのなかには、特定の価値観からの方向付けも含まれる。インターネット上の発信も、こうした様相からもちろん自由ではない。責任を負う企業体が存在しないぶん、よりひどい私的「報道」となっていることがむしろ多い。

メディアのこうした性質は多くの人を苛立たせているし、学術世界の住人は、大衆におもねるメディアの粗雑な物語にしばしば憤る。とりわけ社会学研究者にとっては、「社会」像を提出することにおいて、メディアが社会（科）学^{ライバル}の対抗者であるだけに、当惑はある意味でより深い³⁾。発信や消費の量では勝負にならないからこそ、メディアの非客観性や歪曲ぶりを批判したくなる。社会学はメディアに対して、どこか平静でいられないところがある。

批判はときに必要だが、それだけでは不十分だ⁴⁾。重要なのはむしろ、それほど信用のないメディアが、社会内にいわば通常化^{ノーマライズ}されて作動しつづけていることの方である。「まったくメディアは！」などと言いながら、人々はメディアが埋め込まれた社会を平然と生きている。「不信」のただなかで、どういうわけか「事実」や「真実」も受け取れると思っていられる。社会学が取り組むべきは、この位相を捉えることである⁵⁾。

私見では、ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンによる『マスメディアのリアリティ』が、この課題にもっとも迫っている。ただし、ルーマンの研究において、このテキストは少し奇妙な位置にある。数多くの著作のなかで、(マス)メディアを主題とした作品はこれだけなのだ(何と言っても、彼は『社会の(マス)メディア』を書いていないのである！)。長大な書物群で名高いルーマンとしては例外的に短く(それもあって、彼の著作のなかではたぶんもっとも読まれている)、その意味でもかなり孤立的な作品である。ルーマンは、社会システム論やオートポイエーシス論を高度に展開した理論社会学者として知られるが、『マスメディアのリアリティ』が彼の理論体系から直接導出されているとはいえない。システム論云々を脇に置いて、メディアの社会学的考察としてこの本を扱うことも可能ではある。とはいえ、独特のやりかたでシステム論やオートポイエーシス論を鍛え上げ、社会の体系的把握に挑戦しつづけたルーマンの思考のなかで、メディアがどのような位置にあるのかは、社会学研究者としては気になるところだ。完成したシステム論／オートポイエーシス論があって、その模範演技としてメディアを論じてみせたというわけではないが、それらの理論的思考と繋がっていることもたしかだからだ。

佐藤俊樹の『メディアと社会の連環：ルーマンの経験的システム論から』は、この問題に真正面から取り組んだ名著である。本稿では、佐藤のこの論考を取り上げつつルーマンのメディア論を考えると、一種の重ね焼き的読解を行う。この二つのテキストは先行－後続関係にあるが、前後関係に基づいて後続者の正確さを測ったり、議論の進展の度合いを評価したりする書評形式からはみ出して、二つのテキストをいわば三角測量のように用いながら、両者が考察対象とした現代のメディア社会の位相について考えてみたい。なお、『メディアと社会の連環』からの参照・引用は(S:参照頁)、『マスメディアのリアリティ』のそれは(L:独語参照頁=)和訳参照頁と表記する。

2. 佐藤によるルーマン・システム論の整理

この書物で、佐藤は二つの主題を展開している。

【A】『マスメディアのリアリティ』を出発点として、マスメディアという「システム」と現代社会との「連環」をめぐる自身の社会学的考察を行うこと。もう一つは、

【B】ルーマンのこの著作を、オートポイエーシスをめぐる彼の社会学的思考を凝縮した概要的作品と捉えたうえで、その意義を論ずること

である。『マスメディアのリアリティ』を梯子にして【A】と【B】のあいだを上下移動する、あるいは、細かく上下運動をしながら【B】へと上昇していく。そんな思考の運動を行っているといえいいだろうか。

ルーマン論的には【B】の方に比重が置かれるだろうが、彼のシステム論／オートポイエーシス論に対する純理論的関心は、筆者はそこまで強くない。とはいえ、【A】と【B】とは連結しているから、【A】との繋ぎ目になっているかぎりでは【B】に論及することは必要だろう。具体的現象の経験的分析の切れ味にルーマン理論の意義があるというのが本書の主張なのだから、ある意味でそれは適切なことですらある。そして、「経験的システム論」という規定自体が、【A】と【B】とをつなぐ継ぎ目の本質的部分を構成している。そういうわけで、【B】から始める。

「社会システム」は何でありうるのか」（2000）から始まる佐藤のルーマン研究は、俯瞰視点から世界を説明しつくす壮大な体系として彼のシステム論を評価することに対する疑念を出発点としている。『意味とシステム』（2008）において著者は、特定の社会現象のまとまりに「システム」を見出すとき、それらのシステムが「ある」とされるその様態の差異、言い換えればそれぞれのシステムの境界条件の差異を、それらがじつは「システム」ではない可能性も含めてきちんと検討することが必要であると論じた。

「システム」の存在様態に関する精密な検討抜きで複数の「ある」を同一であると前提すると、「システム」は「社会」の秘教めかした言い換えで終わってしまう。ルーマンは、行為を原子論的単位ととらえる構図を解体することで、パーソンズ的な秩序問題＝ホップズ問題を「解決しない」というかたちで巧妙に解決した（Luhmann[1981=2013:211-327]、馬場[2001]）。これが彼のシステム論のわりと見えやすい意義のひとつだが、それに代わって、問いはシステムの存在様態をめぐるそれへと転移したのであり、ルーマンに触発された理論研究にとっても、これに取り組むことこそが最重要の課題であるはずだ（佐藤[2008:esp.193-197]）。

かかる問題関心から、『意味とシステム』は、相互作用／組織／全体社会に関するルーマンの考察を粗に載せた。相互作用という限界事例についての検討も興味深い、とくに重要なのは「全体社会システム」概念の解体である。定義上、全体社会は社会内のすべてのコミュニケーションからなる。これを「システム」と呼んでも、コミュニケーションの総体があるという措定以上のことは引き出せない。全体社会「システム」なるものは、超越論的視線のもちこみによって社会を言い換えたものにすぎない。この指摘は、ルーマンが複数の「システム」間の存在様態の落差をごまかしているのではないかという上記の問題提起の結論ともなっている。

結局のところ、システムとして記述することが有意味でありうるのは、何らかの同一性（「基底的自己言及」）が当事者たちの水準で前提されているか、そこでのコミュニケーションの接続のなかで、結果的にそれに近いものが生成されやすいしくみをもつ領域ということになる。組織やその近傍にある、いわば準組織な組成における具体的な挙動を観察すること。特定の制度的組織におけるある挙動が他の制度的組織の刺激（Irritation）になって、特定の挙動をうみだす。その

挙動がもとの組織に刺激を与え返すことで、複数の組織が(結果的に)連結する。相対的に安定的だったり(構造的カップリング)一時的だったりするこの図柄を捉えること。さらに、こうした連結の図柄の多角的な諸効果を解析すること——具体的に観察可能なこれらの事象に対する経験的分析に適用するとき、ルーマンのシステム仮説はしばしば犀利な切れ味を見せるのである。

3. 経験的システム論へ

『メディアと社会の連環』はこうした視座に「経験的システム論」という名称を与えた。大きく言えば、二つのポイントがある。

(1) ルーマンのシステム論に関する自身の探究を、晩期のオートポイエーシス論の読解とその理論的射程の検討へと、より明瞭に焦点化した。要素が要素を生み出しつづける——あるいは、要素が他の要素との関係においてのみ要素となる——ことで、当事者視点から見て「一つの全体」をかたちづくる時、オートポイエーシスが成立している(S:18-19、240-244、281-288)。社会内のコミュニケーションの不可視の総体を超越論的に「システム」と言い換えるという方途を明瞭に否定したからこそ、「コミュニケーションがコミュニケーションを生む」連鎖として具体的諸事象を描出するという問題関心がくっきりと浮かび上がる。

(2) 「経験的システム論」を「中範囲の理論」に開いた。これは、当事者がそう観察しているか否かというところに、オートポエティックな要素の産出を見いだせるかの基準を置いた(1)と強く結びついている。研究者が外から「システム」を実在論的に名指せるとする立場を否定することで、a) 当事者たちが内部観察を行っている b) 当事者ではない研究者は当事者たちや彼らの観察している要素の産出を観察している c) 研究者の観察は当事者の観察に部分的には準拠しているが、d) 完全には一致しえないかぎりにおいて外部視点ではある。同時に、e) その外部視点は当事者たちの観察から独立した、超越的なものではありえない(=オートロジー)、という、陰影に富んだ経路が開かれる(S:191-194)⁶⁾。

d)、e)を考えると、「システムは当事者からそう見えることを要件としている」というよりも、「当事者視点でないとはいえない」、あるいは「当事者視点から見てシステムでないとはいえない」と表現した方がより正確なのかもしれない。一方、c)とd)から、研究者の視点が当事者の観察に誠実になぞることを自己目的化しがちな、経験的研究の鈍感さもよしとしていない。システムと呼べるかどうかという問いは、このようにして、内部観察の連続体へと翻訳される。

システムの外に立てるとする視点を方法論的に封印することで、事象の具体性が織りなす比較的狭い局域が目に入ってくる。事象自身がぼんやりとした光源となるようにして、それが有するさまざまな開きの可能性を具体的に考えていく。オートポエティックな要素の鎖列についても、そこにオートポイエーシスが見いだせると仮定すれば、その事象群の何が見えてくるか、また他の事象群といかに関連するかを、多重的に考察する手がかりと捉えられるようになる。検討の結果、それがオートポエティックなシステムではなかった(要素が十分に要素でなかった、他の要素が混在していた、要素間の接続が不十分であった、もしくは過剰であるので単一の要素と見なせない、など)と分かったとしても、それとして先に進んでいけばいい。このようにして、「一見意外な帰結も導き出すが、それもふくめてきわめて論理的で、当事者の観察の少なくともある面と合致する命題群」(S:10)を提示することが、著者のいう「経験的システム論」である。

社会記述をめぐる佐藤の議論は適切であると思う。システム論というスタイルを取らなくても、具体的な事象の配列の複雑性や多層性をもとに／について考えていけば、似たような構図にたどり着く。ルーマンのシステム仮説によって事態の複雑さをより精緻に解剖できるのなら、それはいいことだし、じっさい、いくつかの局面でかなり有望そうだとすることを、本書はうまく示している。

とはいえ、むしろルーマンにあまり思い入れのない人の方が、この議論に素直に頷けるのかもしれない。たとえば『意味とシステム』の公刊後、そこで提出された「行為の意味の事後成立性」モデル（佐藤[2008:esp.199-202]）に対して、少なからぬ論難が生じた（三谷[2009]、北田[2018]など）。本書でもこの点に関する詳細な考察があるが（S:251-277）、そこで述べられているとおり、極端な主義主義を採用しないかぎり、行為をそう捉えるのが普通だろう。他者とのコミュニケーション（とりわけ組織内の）において、自分や他者の行為の意味が事後的に決められてしまう側面があることは、論理的にも経験的にも納得しやすい。

じっさい、ルーマン自身が、そのようなかたちで「システム」を観察している。『マスメディアのリアリティ』にも、行為の意味の事後決定性に類する記述は非常に多い。たとえば以下のような記述は決定的だろう。

経験的社会学において広く行き渡っている誤謬に対抗して強調しなければならないのは、行為も行為者も経験的事実としては存在しないということである。ある行為の、またある行為者の境界線（したがってその統一性）は見ることもできないし、聞くこともできないのである。いずれにせよ、制度的に、そして文化的に設けられた構築なのである（L:65-66=54）。

4. 「経験的」とルーマンの文体世界

けれども、ルーマン解釈という意味では、この問題はかなり根が深い。上の引用が示しているように、彼はある面ではたしかに、佐藤のいう意味での「経験的システム論」を実践している。しかし他方では、つねに（諸）「システムが実在するという前提」で話を始め（Luhmann[1984=1993:17]、Luhmann[1997=2009:1]）、「一般システム理論は「パラダイム転換」をもたらしスーパー理論」などと口走ったりする（Luhmann[1984=1993:5-6]）。ルーマン好きのなかでは、彼のこの側面に惹かれる人がやはり多いのだろう。

もう少し踏み込もう。普通のシステム論者は実在的システムをもっと素朴に措定し、その外に立てるかのように語って人をうんざりさせるが（パーソンズのスタイル）、ルーマンは「システム」を天下りさせるのではなく、むしろ、「システムが実在する」はあくまでも自己の研究の「前提」であり「仮説」であると言い続けた。だからこそ、システムが実在すべきという異様な執着を感じさせるところがある（佐藤[2008:2-7]）。システムの実在にいつか辿り着けるという信念を強烈に保持しながら、それを意味作用との複層的な連関のもとで観察しようとする。さまざまな社会事象に非常に多くのシステムのまとまりを見いだし、それらを覆うはずの全体社会「システム」に賭ける。一方に、このようにして超体系性を強く指向する、本人にとっては自然なパッションがあり、他方で、頭の鈍い人なら無反省にシステムとしてしまうところをわざわざ細分化し、システムの到来をあえて差延するようにして流動化させ、しばしば流産させる。相反するベクトル

が同時成立しているかのようだ。

いや、同時成立させるために延々としゃべりつづける、といえはいいのだろうか。たとえば根源的差異からの発生論、あるいは差異を成立させる区分のオートポエティックな連続的算出の展開過程——各局面においては細密だが、多すぎる変数のつながりはしばしばあやしく、全体としてはにはわかには信じがたい——を、延々と追っていくこと。それはまた、近代社会の機能分化を、古代を淵源とする「分出」の過程として辿る、もしくは、分出の相關項としての古代中世のざわめきを反復的に参照しながら、近代以降の分出を描いていく、ゼマンティックの様式としても現れる。カッターの細かい刃をあちこちに飛ばすようにして、歴史的事象に切り込みを入れては別の事象に接ぎ木する意味論のあの文体は、思いもしなかったところで意外な洞察を与えてくれるが、しかしこの大胆な語りの冒険は、何も書かれていない「進化」の地図をなぜか手放そうとしない。それはやはり、どこかドイツ観念論とくにヘーゲルに似ている（河本[1995:331]、大黒[2006:248]⁷⁾。目的論の成立可能性、全体性の到達可能性という概念までもゼマンティックの俎上に載せ、徹底的に分解した（Luhmann[1981=2013:1-42]）跡地に立つ、目的論なきヘーゲル。

これが、ルーマンの思考の異様さなのだと思う。たぶんルーマン好きのなかにはもう一つの層があって、彼らは「スーパー理論」の全能性を真受けするというより、むしろこちらの側面に魅惑されている。たしかにルーマンの作品群には、最終的な整合は取れているかは分からないが、とにかく複雑で壮麗、それでいて精緻なパズルのようなところがある。アタマと腕に覚えのある人が、解釈の整合性や無矛盾度を競い合いたくなるような……。

「経験的システム」という規定は、この二つのルーマン受容の台座を、意図的に破壊しようとしている。とはいえ、「経験的」という視点がもたらす帰結はまだ見えない。ベクトルの同時成立への根源的衝動から発するルーマンの文体世界のどの部分がどの程度、「経験的」によって壊れるのか、それとも変形しつつ残るのか。たとえば、近代への／近代からの「進化論」的構図——ルーマン的に言えば、全体社会の歴史的同一性を支える超歴史的システム、ということになるだろうか——はあれでいいのだろうか。またその関連で、ゼマンティックが本当は何をしていることになるのか、など。

佐藤も示唆するように、これらは最終的に、社会学という書き方自体の問題でもある。全体社会が「システム」でないとしても、社会学が社会学であるかぎり、地平としての全体社会を——到達できない、到達する必要はないとしながらも——想定せざるをえない。ルーマンはこのことにいち早く反応し、命が尽きるまで向き合いつづけた。社会学者は誰でも、この問題を免れてはいない。

5. メタファーの位置について

もちろん、それをルーマンの文体世界のもとで考えなければならないかは別の話だ。「ルーマン好き」という自己規定をとくに引き受けなくてすむ筆者のような研究者と佐藤とでは、おのずと立ち位置が異なってくる。そう考えると、おそらく、ルーマンの書き方のどこをどこまで壊せるか、あるいは書き換えられるかを手探りすることも、著者のいう「経験的」のなかに含まれているのではないか。本書は社会現象を具体的に描く「中範囲」の理論としてルーマンのシステム理論が応用できることを主張しているが、何というか、「中範囲」の具体的考察、のための経験

的システム論を構築する、ための理論的考察、みたいなのところもある。「理論社会学嫌い」の理論社会学といってもいい(S:408)。

この関連で、メタファーに対する評価が変化してきているのも興味深い。もともと、アナロジーの安易な導入にはかなり批判的な人だが(S:85-86)、「頭が痛くなる……術語の森」(S:279)に分け入ることで、「周期アトラクター」のような「かなり良い喩え」(S:317)と、スペンサー・ブラウン代数が代表とされる、「あまり意味のない」メタファー(S:323)とを腑分けする作業に足を踏み入れていく。

ルーマンのオートポイエーシス論は、サイバネティクスや生物学理論の用語系を、物理・力学系でもなければ、生物学的な統一性ももたない社会に当てはめるものだ。もし、a) 従来の用語系の粗さのゆえに十分に捉えられていない事態があり、b) メタファーによって近似的にしか表現もしくは推測できないとすれば——これは逆方向にも働き、b) 新奇な用語系を比喩として導入することでa) 従来の用語系の粗さを対象化できる——、彼のこの選択に一定の意義がある可能性がある。メタファーが何か意味ある事態を近似していると仮定するとき、それが指し示そうとしている圏域を、なるべく正確に近似することが必要になってくる。「[ルーマンに類出する力学系の用語の援用は、] 社会が力学系だからではなく、コミュニケーションシステム論が論理構成上、力学系の理論と部分的に同型であることによる」(S:324、強調は原文)。

しかし、表現されるべき事態の微妙さとメタファーのコノテーションの微妙さとのあいだには、かなり厄介なトレードオフ関係がありそうではある。表現したい事態が微妙だからメタファーに頼るのだが、そうすると、新奇なメタファーが増殖しやすくなる。本来メタファーというのは、それを用いることで何らかの直観的理解を促す(それゆえ、誤った直観的理解に結びつく危険性もある)ものだ。あまりに多くの新奇な比喩の導入は、エコノミーから外れてしまう。

本書が行っているようなフォーマライゼーションによって、新たに分かる部分もある。けれども、ルーマンの書き方には、どこか本質的にフォーマライゼーションが追いつかないところがあるのではないか。その意味でもルーマンは、延々と考え、しゃべりつづける人である。その圧倒的な言葉の集積——あえていえば、そこに「社会学」を感じるのである。それは、「ルーマン社会学」があるかどうかとも関係してくるかもしれない(S:405-406)。

そのうえで、ルーマンがなぜそういう書き方をしたのかは、筆者には今一つ掴めないが。その点も含めて、今後の進展に関心をもって見守りたい。

6. 複数の「メディア」概念

[B] に関してもう一点だけ。

佐藤は『マスメディアのリアリティ』を、ルーマンのオートポエティック・システム論の理論的・経験的意義を要約した著作としているけれども、この孤立的作品が彼の研究史においてどういう位置にあるのかについては、じつは論究していない。著者はおそらく意図的に、この点に関する言及を避けている。学説史に足を取られるのを嫌ったのだろうが、外から見ると、これはやはり、かなり問題含みに見える。

周知のように初期ルーマンは、AGILの機能領域ごとに割り振られ、「構造的な要素間の二重の相互交換」を可能にするコミュニケーション・メディアというパーソンズのアイデア⁸⁾の換骨

奪胎を繰り返し、「象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア (symbolisch generierte Kommunikationsmedien)」の理論を構築することで、自身の地歩を固めていった⁹⁾。それは、パーソンズの設定したダブル・コンティンジェンシー問題の拘束から次第に離脱していく長い旅路でもあった。

その後彼は、流布メディア (伝播メディア) (Verbreitungsmedien) についても論じ始める。この概念が出現したのは1984年の『社会システム理論』からであるらしいが、そこでは、①コミュニケーションにおいて他我を理解すること、②コミュニケーションが到達すること、③コミュニケーションが受容されて従われ、成果をもつことをめぐる「三つの不確実性」に対応する三つのメディアとして、①言語メディア、②流布メディア (伝播メディア)、③象徴的に一般化されたメディア (成果メディア) が名指されている (Luhmann[1984=1990: (上) 247-257]、ただし流布メディアは「拡充メディア」と訳されている)¹⁰⁾。さらに、『社会の芸術』(1990) が大きな契機となり、彼はこれに、フリッツ・ハイダーのゲシュタルト心理学を援用して④形式／メディアという二分法を付加するようになった¹¹⁾。メディア概念のこうした多重化の流れのなかで、1996年の『マスメディアのリアリティ』が登場したのである。

とくに厄介なのが④形式／メディアである。特定の観察の時点で見いだされる比較的緊密な／ルースなまとまりとして、形式／メディアのカップリングを捉える。「象徴的に一般化されたメディア」等とは明らかに方向性が異なるが、相対的把握であるぶん、形式／メディアの重層構造を見いだしやすい。知覚と「見え」と素材^{マチエール}の関連が本質的である芸術を論じたことがきっかけだったのは、それなりに理解できるのだが、なぜこの概念を大々的に導入するようになったか、筆者にはよくわからない。自分が語ってきたさまざまなメディアをうまく結びつける接着剤として、この概念を使いだしたのだろうか。形式／メディアによって、ルーマンのメディア概念が統合されていると評価する人もいるけれども¹²⁾、伝統哲学における基体もしくは質料／形相の焼き直しみたいところがあり、筆者には、ルーマンにしては凡庸な発想に見える。いずれにせよ、そこまで真剣に構造的統一性を考えているとは思えないところで、「知覚メディア」、「意味というメディア」(!) など、ますます気軽に「メディア」を名指す傾向が、形式／メディア概念の導入後に強まったことはたしかだろう。

このように、メディア、メディア、メディアなのである。そのなかで、『マスメディアのリアリティ』が世間的にかなり成功し、ルーマンにとってのマスメディアの存在感も増していく。しかし、マスメディアを独立した機能システムであると捉えている以上、メディアとしてのその位相は、言語メディア、流布メディア、成果メディア¹³⁾とは異なっているはずだ。じっさい彼は『社会の科学』において、「メディアとは何か。コミュニケーション・メディアとは何か。象徴的に一般化されたメディアとは何か。……最初にはっきりさせておかねばならないが、いわゆる「マスメディア」つまり新聞やテレビなどを話題にしているのではない。……以下の考察は、これまで結びつけられたことのない理論的な出発点に連なる。その一つはフリッツ・ハイダーの知覚メディアの理論、もう一つはタルコット・パーソンズの象徴的に一般化された交換メディアの理論である……」と述べていた (Luhmann[1990=2009:164-165])。

さすがにばつが悪かったのか、『マスメディアのリアリティ』では、言い訳めいた文章が出てくる。

コミュニケーションを運搬しているのは文字ではなく、製品が機械を通して運搬されているのであって、そのことがマスメディアという特別なシステムを分化させている……。ここでいう伝播技術は、経済を分化するためにその媒質（メディアム）としての貨幣が行う役割と同じである（L:8-9）。

ここでは逆に「伝播技術」と「貨幣」で、流布メディアと成果メディアを一跨ぎにしている。さらにいえば、「伝播技術」が成果メディアに繰り込まれており、両者がメディアムと名指されている。形式／メディア概念を援用して、マスメディアは伝播技術を素材としていきたいのだろうか。その後の議論のなかでは、マスメディアと流布メディアや成果メディアの諸要素とのつながりがさまざまなかたちで扱われているのはたしかだが、これらが媒質として包括的に言及されているのは、たぶんこの箇所だけだったと思う。いずれにせよ、この文章は、複数形で出現する Massenmedien と、Kommunikationsmedien の単数形（もしくはそれらの包含者）としての Medium との、小さくないずれを指し示しているように見える¹⁴⁾。

それに対処するためか、『社会の社会』第2章では、「コミュニケーション・メディア」が論じ直されている。「メディアと形式」を先頭に、流布メディアと成果メディアがまず要約的に紹介されたあと、言語、文字、活版印刷、電子メディアと論じられていく（ここまで流布メディア）。次いで、成果メディアが4節にわたって分析される構えになっている（Luhmann[1997=2009 (1):209-474]）。言語や文字の考察を中心に、ケネス・パークを思わせる鋭い記述を随所を含むものの¹⁵⁾、形式／メディアの議論はあまり利いていない。そして、そもそもこの章にはマスメディアが出てこない。マスメディアが扱われるのは第5章「自己記述」においてなのである（Luhmann[1997=2009 (2):1421-1436]）。

いったい、どうなっているのだろうか？ たいへん興味深いところだが、ここで「整合的」解釈を提出するつもりはない。ただ、一部の人が考えているように、ルーマンが最終的にメディア一元論を採用したとは思わない（大黒[2006]）。「コミュニケーション」を決定的な鍵語として選び取り、コミュニケーション一元論をやっている以上、メディアを同じ位置には就かせられない。それをやると、コミュニケーションとメディアのお手玉になり、結局はお互いのお互いの言い換えになってしまう。裏返せば、普通のメディア論／コミュニケーション論は、わりと無自覚にそうしているところがある。はるかに複雑化した経路において、彼がこの罠にはまった（はまりかけた）可能性はある。たとえば、この本を『マスコミュニケーションのリアリティ』と題することは、彼にはできない。だから『マスメディアの～』となるが、この「メディア」は事実対応的ではあれ、概念的には空所である。マスメディアの「リアリティ」という、他では使っていない言葉を用いたのは、このあたりを糊塗する意図も隠れているのかもしれない。

7. マスメディアというシステム

【A】の分析に移るために、補助線の一つ入れよう。

『マスメディアのリアリティ』には、多くの有益な問題提起と鋭利な視点がつまっている。いわゆるマスメディア論として見ても、ずば抜けた議論が展開されている。筆者がとくに感銘を受けた点を一つだけあげれば、報道／広告／娯楽という区分を論理化しようとしていることだ。

テレビ画面上で報道／広告／娯楽が平然と継起交代するしきみを最初に「発見した」のはレイモンド・ウィリアムズだろう。有名な「コミュニケーションのフロー」概念は、アメリカ在留中に、初めての経験であるかのようにテレビをまじまじと見たときの啞然とした経験を表現したものだ(Williams[1974 → 1990=2020])。そこでは、メディアにおいて「自然」なものと慣らされてきたものの不自然さへの驚きが、感動的に描きだされている。もっとも、ウィリアムズがフローの構造をうまく解けているとはいえないが。教条的な人ではまったくないけれども、どうしてもマルクシアン流の資本主義イデオロギー分析に傾く。左派的な理念の硬直を歴史の落穂拾いで補正し、考え直していくという最大の長所が、テレビという新しい現象を相手にするとうまく活かせなかったようだ。しかし、彼以後のメディア論は、フロー概念を教科書の1ページに加えて安心し、不自然さの自然視のなかで再びまどろんでしまう。

明らかにルーマンは、ウィリアムズの驚きを再励起させている。マスメディアを報道(ルーマンはニュース／ルポルタージュとしている)／広告／娯楽の継起するシステムと規定し、それぞれをかなり自律的な構造として別個に捉えたうえで、それらの統一体(Einheit)としてマスメディアを描こうとするのである。

マスメディアがニュース／ルポルタージュ、広告そして娯楽といった三つの、かくも異なった柱をもっているにもかかわらず、それがマスメディアというひとつの統一体であるとするテーゼを受け入れることは、容易ではない。……確かに、これらの三つの領域が同一の頒布技術を使っており、定期的にひとつの新聞において、あるいはラジオやテレビのひとつの放送時間内に見出せるということは、経験的に容易に納得できる。しかし、インフォメーション／非インフォメーションというコード化という視点から考えるならば、個々のメディアの領域で刺激とインフォメーションがいかに実現され、また生成されていくか、という点においてさまざまに異なっていることは興味深い(L:99)。

このように述べたあと、報道／広告／娯楽の三領域における「刺激とインフォメーション」の「実現と生成」をめぐる、彼は多様な論点を切り出し、アクロバティックな力技を見せてくれる。その詳細については踏み込まないでおくが、ではルーマンが「フロー」の不思議さを解けたのかというと、かなり微妙なところもある。たとえば、以下のような記述。「総合的には、マスメディア・コミュニケーションの三つのすべての形式が果たす意義とは、そしてそこにこそ一致をみるのであるが、後続のコミュニケーションへとつなげていく諸前提をつくることにあるのであり、しかもその諸前提はことさらに同時にコミュニケーションしなくてもよいものである。このことは、価値やライフスタイル、流行か時代遅れかという判断に関して、アップ・ツー・デートな情報通であるということにも、あるいは現代の文化に精通しているということについてもあてはまる」(L:99-100、強調は原文)。なるほど。しかし、いったいこれは「説明」なのだろうか？ ほとんど「マスメディアがある」(番組編成が話題を自動的に切り替えてくれる)ということを反復しているだけのようにも見える。

つまり、ルーマンはここでも、「システムはある」という仮説から出発しているのだ。「『マスメディアのリアリティ』における」こうした理論的整理は、マスメディアが近・現代社会の機能

システムのひとつだという仮定によって行われる」(L:17)。考えてみれば、劈頭に置かれた衝撃的な一文が、そう宣言していた。「私たちは、私たちが生きる社会、あるいは世界について知っていることを、マスメディアをとおして知っている」(L:7)。ほとんど格言を思わせるこの文章はいろいろに解釈できるが、マスメディアが環境化し、日常を取り巻いた世界でないと、こんなことは言えない。

むしろ、そのようにして彼は、マスメディアのフローを「解く」ことの意味自体を変えたと考えた方がいいのだろう。マスメディアの不自然さは驚きである。しかしそれはつねに、マスメディアがそのようであることが「経験的に容易に納得」されることとともにある。「驚き」を出現させ、同時にその幻滅の構造を執拗に分析していく。そんなかたちで、「マスメディアがシステムとして埋め込まれた社会」についての理論社会学的考察を行っているのである。

マスメディアのリアリティ——そのリアルなリアリティ、とも言うことができるが——は、それ自身のオペレーションにおいて成立している。……そのオペレーションの仕方が、マスコミュニケーションとして可能になるものを構造化し、区切っている(L:10、ただし「マス・コミュニケーション」を「マスコミュニケーション」に改めた)。

オートポイエシスで定義するなら、安定的にニュースがニュースを生むマスメディアをシステムだとして問題ない。普通の(マス)コミュニケーション論のなかにも、かなりルーマンと近いかたちでマスコミュニケーションをシステムと捉えるものがある(McQuail[1975=1979]、McQuail[1983=1985])¹⁶⁾。しかし、マスメディアが社会において何をしているかは、「システムである」という規定だけでは明らかでない。佐藤はそれをどう読み解き、自己の考察を展開しているのだろうか。

8. マスメディアの定義と機能

二つの面に分けて考えることにする。

【A1】マスメディアを社会のシステムと捉えたとき、マスメディアはどのように規定されるか。

【A2】マスメディアを社会のシステムと捉えたとき、社会におけるマスメディアの機能はいかなるものか。

『メディアと社会の連環』の論じ方を見よう。

【A1】については、以下の三点が挙げられる。

①ルーマンはマスメディア・システムのコードを情報／非情報(訳文ではインフォメーション／非インフォメーション)としているが(L:34-36、48-49)、佐藤はこれを新しさ(ニュース)／古さ(ニュースでない)とした(S:27—30、32-34)。そして、新しさの受容を、超越的権威が正解となりえない社会において、「部分的知識の更新」によって変化し続ける社会状況に対処する営みであるとする(S:31)。佐藤は、「私たちは、私たちが生きる社会、あるいは世界について知っていることを、マスメディアをとおして知っている」という冒頭のあの一文を、こうした事態の表現と解釈している。

「情報」から「新しさ」への読み替えは理にかなっている。ルーマンのシステム論では、情報は伝達・理解と並ぶ基本的作用とされているので、マスメディアのコードを「情報」にすると、マスメディアがシステム一般の上位に立つ特権的システムになるか、システム一般に遍在することになってしまう。どちらかといえば、後者の危険性が高いのではないか。『リアリティ』12章からの「ラディカル構成主義」をめぐる議論は、主体の意識システムにおける「情報」の水準とマスメディアのそれとを近づけすぎたことの表れであるように見える。混同しているわけではないが、ちがう水準の事態を半ば意図的に近接させ、何というか「ひっかけて」横並びにしていく。ルーマンにはそういうところがある——それが彼の魅力の一端でもあるのだが。

ただし、佐藤が「新しさ」に焦点を当てたのは、報道／広告／娯楽のうち、基本的には日々の定時ニュースのもとでの報道の機制を扱ったからだともいえる（その意味で、意外とオーソドックスである）。ルーマンが「情報」をコードとしたのは、広告という「新しくない」情報の反復的提示が意味をもちうるのはどうしてか、というのを考えようとしたため、という側面がある（L:71-73、77）。

②佐藤は、冒頭部分でルーマンが与えた以下の定義を重視している。この箇所は『メディアと社会の連環』において2回引用されている（S:161-162 および 196）。

マスメディアという概念は、以下では、コミュニケーションを伝播するために技術的な複製手段を用いる、全ての社会的なしくみを包括するものとする。……¹⁷⁾とりわけ印刷によって生産される、本、雑誌、新聞が想定される。また、不特定な受け手 *unbestimmten Adressante* に対して制作物が多数 *in grosser Zahl* 生み出されるという限りにおいて、あらゆる種類の写真や電子データの形で複製されるものもふくむ。また電波を通して伝播されるコミュニケーションもふくまれる。それが一般的にアクセスできる *allgemein zugänglich*……限りにおいて（L:10=8）。

著者はこれを、「メッセージの保存複製可能性」と読み替えた。

どんなメディアがマスメディアだと言えるのか？ この問い自体はメディア論でおなじみのもので、よく聞く答えも大体決まっている。「マス」と冒頭についているように、不特定多数を受け手にして情報の伝達と普及にあたるのがマスメディアである、と。大概のマスメディア論にはそう書いてある。

ルーマンはそれをばっさり切り捨てる。現代のマスメディアの最も基本的な特性、つまり、その基本的な挙動を左右する特性は、そこではない。メッセージの保存複製可能性にある。具体的にいえば、印刷技術や電子の発達によって、メッセージが大量に複製され保存されるようになった。それが、マスメディアの成立にとっては決定的だった、というのだ（S:145-146）。

メッセージの保存複製可能性は何をしているか。第一に、これにより、発信と受信が構造的に切り離される。過去のニュース報道が異なる時空間において再発見され、まったく異なる文脈のもとで意味付けられる（S:147-150）。「誰がいつどんな状況でメディアのメッセージ……を読むか

が予測できなくなった」(S:146)。佐藤がマスの本質を、量としての不特定「多数」ではなく、「不特定」性(Unbestimmtheit)へと変更していることが注目される。通常の議論では、(1)マスメディアの発信が大量の人々＝大衆に接触しているだろうという期待に素朴に寄りかかりつつ、(2)マスメディアの有効性の根拠となっているその大衆が、結局は大量として把握される——だけ——人々として扱われる。著者はこうした「マスメディア論」的構図を切断しているのである。

③第二に、保存複製可能性に着目することで、マスメディアが印刷文化と連続的に捉えられ、インターネットに接続される。「ネット社会は印刷本が超高速で多重に流通していく過程だといえる」(S:197)。インターネットはじつは、基本的には文字／テキストベースのメディアであることはわりと指摘されている。妥当な見解だろう。もっとも、ブログ記事等の定時的発出がニュースに近くなっているのは、書籍ではなく新聞やテレビ等のマスメディアのニュース報道の様式の直接的な取り入れであり(S:21)、書籍からというわけではないが。

9. 社会のなかのマスメディア

【A2】についてもさまざまな論点が展開されている。ここでは以下の二点を扱う。

①マスメディアは他の機能システムを観察することに特化したシステムである。他の機能システムはそれを刺激として受け取ることで、何らかの反応を行うことを迫られる。ノーコメントを貫くこともできるが、それもまた外部からは「反応」と取られ、しばしばそう報道されて、新たな反応を強いてくる。「マスメディアの機能とは結局、社会システムの自己観察の司令塔であるという点にある。……マスメディアの機能とは、四六時中刺激を生成し、処理することにあるのであって、知識の増殖でも、規範への馴致へと方向づけるソーシャライゼーションでも、あるいは教育でもない。……あらゆるオペレーションでいっしょに作動する記憶というものをシステムがもっており、それによってバランスをとっていく……それに特化した機能システムが分化……マスメディアにだけ、私たちはこのような特別な仕事を毎日期待しており……」(L:143-145)。

この視点を受け継いで、佐藤は機能分化社会におけるマスメディアの理論的考察を行う。マスメディアは他システムを観察することで、そのシステムの挙動が外からはどう見えるかという像を提供し、システムが自身の環境(自分以外のシステムも含まれる)を参照しながら遂行しなくてはならないセカンド・オーダーの観察を代行している。著者はこれを、「マスメディア以外のシステムは、マスメディアの報道を通して外部の情報を手に入れるが、つねに自らの「環境」像をフィルターにして受け取り、解釈する」と要約し、その観察の代行があくまでも中途半端なものだと指摘する。

すなわち、他の機能システムは、外部の情報のほとんどを、マスメディアを通してしか知りえないが、マスメディアによる観察が、たいていは粗雑に縮約され、輪郭をつけられることでかえって平板化していることを、たぶん自身がそのように観察された経験を通してあてこんでいるため、メディアの観察に懐疑の目を向けつつける。一方、高度に機能分化した社会では、機能システムの専門分化が進む(自己言及が進行する)ので、外部情報を刺激として独自に取り込むこと自体が困難になる(この後者の論点は『マスメディアのリアリティ』にはない。佐藤による優れた解釈

である)。

その結果、各機能システムにとって、メディアの報道は、「つねに浅く、偏った、不十分なもの」だが、「自らの既存の知識に対する差分」を手軽に知るために便利使用する。特殊なデータベースと契約するといったコストを避けるのなら、それ以外のやり方はない。そして、「その程度でかまわない、と偽悪的に見切ってもいる」(S:175-177)。「偽悪的に見切っている」というのはなかなかの表現だ。そのようなかたちで私たちは、「マスメディアをとおして」社会や世界について知り、生きていくのである。

②もう一つ、ルーマンと比べると、外部からの不信に対するメディア企業の対応に、より力点が置かれている。上記①の裏返しとして、マスメディアは自己の外部たる受け手について部分的にしか知りえないため、「受け手」像を自身の内部で構築する(S:165)。それがマスメディアの内部閉鎖性を生むわけだが(L:9)¹⁸⁾、著者はここに【A1】②における大量性→不特定性という読み替えを重ねる。メッセージの現在の受け手を内部的に想像するしかないだけでなく、保存複製技術の普及により、そもそも読者像が確定できなくなる。過去の記事が突然予想もしなかった意味を与えられ、非難されたりする。メディア企業は、情報サービスを現在提供している特定可能な消費者と、論理的に特定不能な(未来の)受け手のあいだで引き裂かれている(S:166-167)。

10. 保存複製可能性をめぐる：放送メディアの位置づけ

以上が、佐藤が提示した構図のおおまかな要約である。『マスメディアのリアリティ』の単なる祖述ではなく、そこから独自に発展させた考察として示唆に富む。とはいえ、多少の疑問がないわけでもない。大きくいえば、【A1】②およびその系としての【A2】②が語っている「保存複製可能性」→不特定性という筋道如何という問題である。

ルーマンの定義を見直してみると、マスメディアを「コミュニケーションを伝播するために技術的な複製手段を用いる、全ての社会的なしくみ」としたうえで、a)印刷によって生産される、本、雑誌、新聞、b)不特定な受け手に対して制作物が多数生み出される[=私的生産ではない]あらゆる種類の写真や電子データの形で複製されるもの[=写真雑誌、ある種の動画配信のたぐい]、c)一般的にアクセス可能な電波を通して伝播されるコミュニケーション[=放送]が列挙されている。書籍を先頭にする印刷技術が範型となっているのは佐藤の指摘のとおりだが、ここで語られているのは複製技術だけであり、「保存」への言及はない。

別の箇所では佐藤は、「ルーマンのいう「不特定な受け手」の出現、すなわち「送り手側の大量複製→受け手側での保存と一般的アクセス」というプロセス」の多重化を語っている(S:196)。たしかに書籍や新聞は複製技術によって大量生産され、これを購入した人は手元に保存できるが、こうしたプロセスが多重化するというのだから、「保存複製可能性」とは利用者による複製技術の使用=コピー可能性/頒布可能性を指す。一方、行文を読む限り、ルーマンは基本的にメディア産業=供給側が複製技術を用いると想定している。

ルーマンとずれること自体はいいのだが、佐藤のように定義したとき、大きな問題が生じる。c)の放送メディアが落ちてしまうのだ。正確には、カセットテープレコーダーが浸透していった1960年代半ば以前のラジオや家庭用VTRが普及した1980年代半ば以前のテレビはマスメディア

でないことになる¹⁹⁾。それらのコピーの大量頒布となると、YouTube (2005 年～)、ニコニコ動画 (2006 年～)、TikTok (2016 年～) 以降のことである。

本書のなかでも、この点に関する言及がないわけではない。「これ [= メッセージが送り手側で大量複製できるようになること] は「大衆」性の必要条件であるが、全てのマスメディアが同じように保存可能なわけではない。……ラジカセ……普及以前のラジオは、活字本よりもメッセージをむしろ保存しにくい」(S:162)。だが、それが何を意味するのかは論及されず、すべてが「保存複製」できるかのような現代の情報・メディア環境に記述が流れていく。「実際、もしマスメディアの報道が例えば国会図書館でデジタル・ライブラリーに保存されて、誰でも簡単に入手し再配布できるようになれば、送り手であるマスメディアにとって、メッセージの最終的な受け手は全く限定できなくなる。文字通り「不特定」で「多数」になってしまう」(S:163-164)。この記述は、「電子メディアのネット社会」が「マスメディアのあり方を突き詰めた」形態であるという論証のなかで現れているのだが、むしろ、テレビ等の放送メディアにおける「保存」が現状では穴だけであることを逆照射しているのではないか。

現在のメディア環境(とりわけ、日本の)に向かって、歴史性がやや押しつぶされているわけだ。しかし、この点の揚げ足取りをしたいのではない。放送メディアはたぶん今後も、穴だらけのままいくだろう。もっとも日常的時間に接触しているにもかかわらず、いや、だからこそ。私的複製の勝手なアップロードは増えつづけ、ますます疑似アーカイブのようにふるまっていくが、同時に——それを密かに当てにしつつ——公的にアーカイブ²⁰⁾されることもたぶんない²¹⁾。問題は、放送メディアがまさにそういう性質の——流しっぱなしでメッセージをばらまき、「保存」はあからさまにいいかげんな——メディアとして存続しつづける、そのことの意味は何なのだろうかということなのである。

著者はマスメディアとそれが埋め込まれた現代社会の姿のある部分を精密に考察した。だが、マスメディアにはそういう側面もあるのではないか。放送メディアがマスメディアとして何をしているかの考察を加えれば、さらに立体感が増したはずだ。その点がやや惜しまれる。

11. 不特定性の地平をどう捉えるか

そう考えると、受け手の不特定性の位置づけも変わってくるのではないか。

不特定性への着目が、通常のマスメディア論における大量 = 大衆概念を脱構築したという点に関しては、すでに触れた。これを延長すると、マスメディアの公共性の問題とぶつかる。たとえば新聞は商品として購読者に買われるが、そこに留まっていれば、それは単なる私有物である。ところが、18 世紀のカフェや 19 世紀の新聞閲覧室を考えてみればわかるように、西欧においては、購買力をもたない層へと「商品」を開く動きが随伴していた。そのとき、新聞の読者は購買者を越えた不定な性質をもつことになるし、またそれをある程度前提として、記事が書かれていくようになる。世論の誕生もこれと関連している。公共性の成立と拡張にとって、不特定性は本質的要素のひとつだったのである。

その向こうで、20 世紀初頭に「大衆」という概念が誕生する。人々の可視的な集まりとして問題化された群衆(群集)や雑踏とは異なり、大衆は目に見えない。そして、まさに不可視の巨大なまとまりとして概念化 = 問題化された²²⁾。つまり、「大衆」はそれ自体で不特定性を孕ん

でいるのである。いうまでもなくそれは、大量生産＝大量消費のシステムを埋め込んだ産業社会が成立した時代の出来事である。そのなかで、大衆＝大量メディアが、システムのなかで蠢くこの透明な塊を馴致するための装置として整えられていった (McQuail[1975=1979:164]、Williams[1976=1980:224-231])。不特定性をあてにした公共性の拡張への期待と、不特定で物言わぬ人々の大量の集まり。この両者を合わせて、タルドの新聞公衆論の裏返しのようにになっている (Tarde[1901=1987])。

テレビが普及する戦後には、大衆の不特定性はさらにもう一段深化する。マスメディアは、大衆といいながら家庭に入りこみ、アトム化し私秘化 (privatization) した不特定性と対峙する。ニュースを共有する家族の機能や口コミの影響力への期待と不安が交錯し、テレビは、繰り返し同じ緊急ニュースを伝えることで、公共性というより広報に近くなる。ある出来事に瞳を集中させることで、「テレビのもとで国民を一つに (One Nation under Television)」という幻想が繰り返し語られては幻滅する (MacDonald [1990]) ——。このあたりが、放送メディアの地平である。受け手の不特定性を呼び出すと、こうした複雑な連関を反省的に捉え返すことができる。

それに対して、不特定性に対する佐藤の関心は、現在の位相により強く根差している。インターネットが飽和状態に達した現在、「何者かを論理上特定しえない受け手」が過去の発信を掘り返し、いつ牙を剥いてくるか分からないという漠然とした不安が蔓延している。こうした現在のメディア環境を背景として、不特定性への読み替えを極限化する、ある意味で一点突破の議論を展開した。著者はこれをメディア企業 (新聞社) に当てはめ、現在のサービス対象である購買者と、未来も含む不確定な受け手が構成するだろう仮想の公共性への要請とのあいだで、メディア企業は引き裂かれつづけるとする。典型的には、世代間の価値観の変動に対する恐れが指摘されている (S:149)。

たしかに、ネットの攻撃対象となりやすいメディア企業は、炎上やデジタルタトゥー等のイメージに、もしかしたらより強く脅かされているかもしれない。だが、かりに本当に炎上したら、メディア企業であれ個人ネットユーザーであれ、現実には「無限の責任」など負うことはできないし、そうしようとしているとも見えない。むしろ、彼らの「無限の責任」をキャンセルするしくみがあると考えた方がいいのではないか。たとえば：

(1) こうした事象に対しては、企業組織の方が対応は容易である。組織防衛と非難されるのを類被りして、都合の悪いことについては端的に無視する、黙る、知らんぷりする。慰謝料が何も言っていない「謝罪」だけリリースしておく。通常の組織的対応を用いることができるし、また用いている。

(2) 愚行を犯した個人の極端な事例として例外化する。実名がネットに晒し上げられて事件化する、不祥事を起こした社員が免職処分されるなど。現実的な対処 (法的措置) の整備も進んでいくので、それを利用することもできる。

(3) 何よりも、情報の洪水のなかで、人々はすぐに忘れてしまう。日々の報道では、慎重に真偽を検証する暇などない。「毎日駆け抜けていく大量のコミュニケーションにおいて、そんなことはできはしない」 (L:12)。そういう社会のなかを「駆け抜けて」いく人々もまた、忘却という安全装置を内蔵している。

こうした要素が協働することで、「そこに「無限の責任」がある」とすることを回避する意味論が働いている。(1)、(2)は要するに「通常の企業のように対応する」ということだから、これはメディア企業の一部が固執してきた戦後日本型のジャーナリズム理念を破壊する方向に作用するが、そんなことを信じている人間は外部にはもうほとんどいないのだから、別に問題はない。とりあえず、それなりに参照できる報道を続けてくれればよい。

裏返せば、戦後日本型のジャーナリズム理念が壊れても、言論で商売している以上、普通の企業よりは組織防衛の発動のハードルは高い。まっとうな言論サービス機関として守るべきラインに対する社会的了解を越えて組織防衛に走ったら、中期的な売り上げ減というかたちで社会的報いを受ける(現に受けている)。言論機関の看板を下ろせないかぎり、メディア企業は防衛線の高さを前提として対応するほかない。しかし同時に、ただの企業の一つであることを認めるようになる。そのような方向に変わりつつある、少なくともそうならざるをえない。それがメディア(企業)と社会との接続をいかに変えていくかが重要だろう。

その意味では、むしろ(3)がポイントで、これは、メディア報道は反応を強く現在化する作用があるということを意味している。現在化作用のもとで未来の不特定性が出現するとして、それはいかにして、またどの程度なのだろうか。このあたりの検討がないので、不特定性が実質的に無限と置かれているように見える。「ルーマンのいう受け手の不特定さ」とハーバーマスのコミュニケーション行為の議論を同位対立と捉えたことは、その表れではないか(S:172-173)。ハーバーマスの公共性論は無限時間の討議を要請している。どう考えてもリアリティを欠くこの主張²³⁾は、佐藤が論じるように、「ハーバーマスがじつは「あるべき公共性の正しい姿」を前提としていたから」なのかもしれない。しかし、その「正しさ」は彼の理論からは導出できない——「正しい」姿を密輸入していることが明瞭になるほど論理的に語ろうとするのは、日本のリベラルとはちがう、戦後ドイツ的な姿ではあるが。それはともかく、本書の別の箇所から引用すれば、不特定性の「解釈度k」の見積もりが必要だったのではないか(S:267-268)。

別の角度から考えてみよう。未来の「受け手」の不確定性というアイデアの背後には、内外の新聞記事等のネット検索が容易になっていることがあるのだと思う。しかし、日本では新聞記事の原則無料公開はやめているし、公開しても期間限定で消去していくことが多い。都合の悪い記事をこっそり削除したという話もよく聞く。欧米の新聞については詳しくないけれども、データベース化はするが登録制にして有料化する、無料で使わせてもデータベースの外には簡単にもちだせないようにする、といった、囲い込みと切り離しをやるのが標準的ではないか。次々と電子版発行に形態を変えていることを考えれば、ネットで無料閲覧できる「不特定」向きの記事自体が減っていくことも考えられる。

その意味で、未来の不特定な読者像を大きく取ること自体が、じつは日本的なマスメディア／言論環境の産物なのかもしれない。たとえば、新聞の縮刷版を発行するという制度。これは大正期の朝日新聞から始まっている(1919年)。初発の動機は手元資料の整理程度だったらしいが、「新聞記事は公共物で著作権がない」という、かつてのインターネットではデフォルトだったパブリックドメインの論理をはるかに先取りしつつ、折り目正しい言論を期待する独特の道徳的風土が立ち上がり始めていたことの兆候となっている。欧米には、上述のカフェや新聞閲覧室のような形

式はあったが、こうしたものはない。新聞閲覧室は、新聞を買えない人々に報道の到達範囲を広げるという意味では、現在の不特定な受け手へと公共圏を拡張するけれども、長期の時間性はもたない。それくらい、新聞ですら「出しっぱなし」だった(マルクスやヴェーバーら、知識人による新聞での過激で活発な言論活動も、「今、ここで」という短い時間性の条件下だからこそ、迫力をもっていたのだろう)。

裏返せば、きわめて早くから独立して縮刷版を生み出した社会では、「後続世代に読まれる」ことをやんわり意識することが、どこかでビルトインされている。縮刷版は、公共図書館と結びつくことで非短期的な時間性をもち、「いつか誰かが読むかもしれない」状態を担保することで、大衆教養主義ともつながる²⁴⁾。新聞が社会全体を包含できる、しなければならないと思っている社会であった(である)ことの現れなのだろう。そこでは、不特定な未来の受け手に向けての不安全感や危機感が発生しやすい。こうした観点から、いくつかの社会の論理を比較することも可能だろう²⁵⁾。

12. 結語

二つのテキストを往復しながら、考えたことは他にもある。とくに、「マスメディアがシステムとして埋め込まれた社会」についての理論社会学的考察が、あくまでも現代においてマスメディアに見えるものを対象としていることに関して。本稿では触れられなかったが、ルーマンはゼマンティックを駆使して現代以前の事象とのつながりを論じており、興味深い論点を数多く提出している。しかしそれでも、(マス)メディア(やコミュニケーション)の概念が中立的であるかのようになされた、現代へのそれらの生成や変容の記述にはいくつかのごまかしや飛躍があり、それが現代社会の理論的把握にも複雑な影響を与えていると感じている。その意味で、佐藤のようなかたちでのシステム論／オートポイエシス論の経験的再構築とも、関連してくると思う。こうした点については、機会があれば論じてみたい。

注

- 1) 「マスメディア」という用語が安定的に用いられるようになったのは1920年代からであり、「パーソナルメディア」は1960年代以降である。
- 2) 公共放送や国営放送はこれを回避できるが、その場合は別の問題が発生する。これについては省略する。
- 3) アカデミックな専門家言説が便利使いされると同時に、彼らに自己宣伝の場を提供していてもいるという意味では、メディアとアカデミアのあいだにはある種の相互依存がある。本当はそこまで考える必要があるが、今回は論じない。なお、遠藤[2010]を参照。
- 4) たとえば取材／観察をどの時点まで続けるかというのは、ある意味で程度問題である。学術研究も無限に観察することはできず、どこかで打ち切らねばならない(ただし、打ち切りの妥当性はつねに検証できる)。学術の観察時間はメディアよりだいぶ長くすることができるが、それは専門家集団内での相互チェックや先行研究参照の制度化や、大学／研究機関の資金に守られているからだ。
- 5) この点については、かつて素描したことがある。遠藤[2003]。
- 6) 『社会学の方法』や『社会科学と因果性』などの社会学理論の研究が、この(1)と(2)、とくに(2)を構造化するうえで有益に作用した。
- 7) 環境が与える刺激とそれによってシステム内に生じる表象とはまったく合致しないとしながら、再参入を挟み込んでしまうところなど、ドイツ概念論の基本的な癖ではないかと感じる。遠藤[2016:687-688]。

- 8) Parsons[1969=1974: (下) 124-132] など。
- 9) 象徴的に一般化したメディアとして、真理、権力、貨幣、愛などが挙げられている。初期ルーマンの対応として、たとえば Luhmann[1973=1990:87-111]、Luhmann [1975=1986:5-28]。
- 10) ただしこの構図の萌芽は、前註で挙示した『権力』にも認められる。Luhmann[1975=1986:8-10]。
- 11) なおこの概念は『社会の経済』(1988)でも言及されている。Luhmann[1988=1991:310-333]。
- 12) 大黒[2006]、高橋[2016]、馬場[2020] など。
- 13) それぞれのメディアの説明として、Baraldi, Corci, & Esposito[1997=2013]。
- 14) なお、英語でも medium (単) -media (複) だが、いわゆるメディアを指す場合、無冠詞単数形で扱われる。medias という表現が成立しているのも興味深い。ドイツ語の意味世界との差異は一考に値する。
- 15) Burke[1941 → 1973]、Burke[1956 → 1961]、Burke[1989]。
- 16) 『マスメディアのリアリティ』においても、先頭の方でマクウェールが言及されている(第1章註4 (L:9))。
- 17) ここでは佐藤による引用に依ったが、原文を見たところ、1文目と2文目のあいだに省略はなかった。
- 18) 同様の指摘は通常のマスコミュニケーション論にもみられる。マクウェールはこうした事態を「想像上の対話者」と表現している (McQuail[1975=1979:178-180])。
- 19) 家庭用VTRの普及率は1987年から88年にかけて50%を突破、1993年に80%に近づいた。
- 20) 文字メディアの保存でさえ完璧ではないが、アーカイブを作ることへの基本的合意が成立している点異なる。
- 21) 資金的にも、商業的理由からも。また、佐藤がいうような「不特定の受け手」からの事後的責任を、放送事業者が問われかねないために。
- 22) 「大衆」という語の始まりは19世紀半ばまで遡るが、当初はMassesと複数形で把握されていた。具体的な人々からなる大量の群れがあり、それらが階級や職業等によって固まりつつ、それぞれ独自に動くという感覚があったのだろう。20世紀以降の単数形Massはそれよりはるかに均質的かつ不可視である。Williams[2016]を参照。
- 23) 無限時間の問題については、註4も参照されたい。
- 24) そう考えると、日本で縮刷版が生まれたのとはほぼ同時期に、ドイツで新聞学研究 (Zeitungskunde) が勃興し、各種新聞研究所でのアーカイブ化が始まったのは興味深い。ベルリンの「ドイツ新聞研究学研究所 (Deutsches Institut für Zeitungskunde)」が創設されたのは1924年のことである。
- 25) たとえば、政治的には民主党支持派と共和党支持派が完全に分断し、いわばマスメディア構造自体が「フィルター・バブル」化した現在のアメリカについて、前嶋・山脇・津山(編)[2019]。

対象文献

- L: Luhmann, Niklas, 1996, Die Relität der Massenmedien, Westdeutscher Verlag. = 2005、林香里訳『マスメディアのリアリティ』、木鐸社。
- S: 佐藤俊樹、2023、『メディアと社会の連環：ルーマンの経験的システム論から』、東京大学出版会。

文献

- 馬場靖雄、2001、『ルーマンの社会理論』、勁草書房。
- 2020、「オートポイエティック・システムとしてのマスメディア：ニクラス・ルーマン『マスメディアのリアリティ』を読む」、『大東文化大学社会学研究所紀要』1。
- Baraldi, Claudio, Corci, Giancarlo, & Esposito, Elena, 1997, GLU: Glossar zu Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme, Suhrkamp. = 2013、土方透・庄司信・毛利康俊訳『GLU：ニクラス・ルーマン社会システム理論用語集』、国文社。
- Burke, Kenneth, 1941 → 1973, The Philosophy of Literary Form, Univ. of California Pr.
- 1956 → 1961, A Grammar of Motives, Univ. of California Pr.
- Burke, Kenneth, Gusfield, Joseph (ed.), 1989, On Symbols and Society, Univ. of Chicago Pr.
- 大黒岳彦、2006、『〈メディア〉の哲学』、NTT出版。
- 遠藤知巳、2003、「メディアそして／あるいはリアリティ：多重メビウスの循環構造」、『思想』986号。
- 2010、「新聞的言論の現在形」、遠藤知巳編『フラット・カルチャー：現代日本の社会学』、せり

か書房所収。

2016、『情念・感情・顔』、以文社。

北田暁大、2018、『社会制作の方法』、勁草書房。

河本英夫、1995、『オートボーイエーシス』、青土社。

Luhmann, Niklas, 1973: Vertrauen, 2. erweiterte Auflage, Ferdinand Enke Verlag. = 1990、大庭健・正村俊之訳『信頼』、勁草書房。

1975, Macht, Ferdinand Enke Verlag. = 1986、長岡克行訳『権力』、勁草書房。

1981, Gesellschaftsstruktur und Semantik 2, Suhrkamp. = 2013、馬場靖雄・赤堀三郎・毛利康俊・山名淳訳『社会構造とゼマンティック 2』、法政大学出版局。

1984, Soziale Systeme, Suhrkamp. = 1993、佐藤勉監訳『社会システム理論』(上)、恒星社厚生閣。

1988, Die Wirtschaft der Gesellschaft, Suhrkamp. = 1991、春日淳一訳『社会の経済』、文真堂。

1990, Die Wissenschaft der Gesellschaft, Suhrkamp. = 2009、徳安彰訳『社会の科学 1』、法政大学出版局。

1997, Die Gesellschaft der Gesellschaft, Suhrkamp. = 2009、馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会 1、2』、法政大学出版局。

MacDonald, Fred, 1990, One Nation under Television, Pantheon.

前嶋和弘、山脇岳志、津山恵子(編)、2019、『現代アメリカ政治とメディア』、東洋経済新報社。

McQuail, Dennis, 1975, Communication, Longman. = 1979、山中正剛(監訳)『コミュニケーションの社会学』、川島書店。

1983, Mass Communication Theory: An Introduction, Sage. = 1985、竹内郁郎・三上俊治・竹内俊郎・水野博介訳『マス・コミュニケーションの理論』、新曜社。

三谷武司、2009、「理論的検討の進展のために」、『相関社会科学』19。

Parsons, Talcott, 1969, Politics, and Social Structure, The Free Press. = 1974、新明正道監訳『政治と社会構造』(上)(下)、誠信書房。

佐藤俊樹、2008、『意味とシステム』、勁草書房。

高橋徹、2013、「機能分化と「危機」の諸相」、高橋・小松・春日(編)『滲透するルーマン理論』、文真堂。

高橋顕也、2016、『社会システムとメディア』、ナカニシヤ。

Tarde, Gabriel, 1901, L'opinion et la foule, PUF. = 1989、稲葉三千男訳『世論と群衆』、未来社。

Williams, Raymond, 1974 → 1990, Television: Technology and Cultural Form, Routledge. = 2020、木村茂雄・山田雄三訳『テレビジョン：テクノロジーと文化の形成』、ミネルヴァ書房。

1976, Keywords: A Vocabulary of Culture and Society, William Collins Son & Co. Ltd. = 1980、岡崎康一訳『キーワード辞典』、晶文社。

2016、川端康雄編訳・遠藤不比人ほか訳『想像力の時制』、みすず書房。